

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第52集

館林市内遺跡発掘調査報告書

—平成26年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査—

咄戸沼遺跡（平26地点）

北近藤第二地点遺跡（平26地点）

笹原遺跡（平26地点）

2014
館林市教育委員会

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第 52 集

館林市内遺跡発掘調査報告書

—平成 26 年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査—

咄戸沼遺跡（平 26 地点）

北近藤第二地点遺跡（平 26 地点）

笛原遺跡（平 26 地点）

2014
館林市教育委員会

例　　言

1. 本書は、平成 26 年度に国宝重要文化財等保存整備事業費補助金、群馬県文化財保存事業費補助金を受けて実施した館林市内における埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 本書において報告する遺跡名は、「遺跡台帳」に基づき以下のとおりである。なお、平成 26 年度は「間掘 1 遺跡」によても発掘調査が実施（平成 27 年 2 月 1 日～2 月 28 日）されているが、報告は平成 27 年度以降を予定している。

地点名は、平成 26 年度の調査であることから、「平 26 地点」とする。

畠戸沼遺跡　北近藤第二地点遺跡　佐原遺跡

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体者	館林市教育委員会
担当課	文化振興課文化財係
調査組織	教育長　橋本　文夫 教育次長　坂本　敏広 文化振興課長　岡屋　英治 文化財係長　石崎　治 係長代理　阿部　弥生 主任　田沼　あゆみ 主任　田沼　美樹 主事　奈良　純一（担当） 主事補　金子　陽祐（副担当）

4. 調査作業員・整理作業員

池下 寛人　久保田 憲 司　小島 鉄 男　阪口 弦 夫　杉田 和 実
高野 愛　寺嶋 美 雪　西谷 義 信　根岸 良 子　橋本 二三夫
原田 和 沙　久田 進　前田 清 美　三橋 瑞 江　渡邊 正 敏
(50 音順敬称略)

5. 出土遺物、調査記録及び資料は、館林市教育委員会で保管している。

6. 本書の編集・執筆については、奈良が中心となり行った。

7. 遺物の実測及びその他の図版の作成は、奈良、金子、池下、根岸、原田、前田、三橋で行った。

8. 調査の実施及び本書刊行にあたり、下記の諸氏諸機関のご協力を頂いた。ここに記して感謝申しあげる。
(順不同、敬称略)

地権者各位　群馬県教育委員会事務局文化財保護課　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
館林市都市建設部都市計画課・道路河川課　館林市環境水道部水道課・下水道課
館林市農業委員会　館林市史編さんセンター

凡　　例

1. 本書における挿図の縮尺は、図中に記した。

2. 遺跡位置図は、館林市都市計画図 (S=1/2500) を用いた。なお遺跡位置図中のスクリーントーン [■] は遺跡地、[■] は調査地を示している。

3. 土層断面及び出土遺物の注記に用いた色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修「新版土色帖」に従った。一部、調査担当者の目視による判断も含まれる。

参考文献

本書を作成するにあたり以下の文献を参考にした。

館林市教育委員会　『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 1 集～第 49 集

館林市教育委員会　『館林市特別編第 4 卷 館林城と中近世の遺跡』2010

館林市教育委員会　『館林市資料編第 1 卷 館林の遺跡と古代史』2011

館林市教育委員会　『館林市双書第 4 卷』1974

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編　『群馬の遺跡 7 中世～近代』2005

目 次

例 言

凡 例

参考文献

目 次

挿図目次

写真図版目次

第1章 館林市の環境	1~2
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1~2
第2章 確認調査の概要	3~10
1. 咄戸沼遺跡（平26地点）	3~5
2. 北近藤第二地点遺跡（平26地点）	6~8
3. 笹原遺跡（平26地点）	8~10

写真図版

報告書抄録

挿 図 表 目 次

第1図 館林市の位置	1
第2図 館林市の地形概念図	2
第3図 平成26年度調査遺跡の位置	2
第4図 咄戸沼遺跡（平26地点）	3
第5図 咄戸沼遺跡（平26地点）トレンチ配置図、基本土層	4
第6図 咄戸沼遺跡（平26地点）出土遺物実測図	5
第7図 北近藤第二地点遺跡（平26地点）	6
第8図 北近藤第二地点遺跡（平26地点）トレンチ配置図、基本土層	7
第9図 北近藤第二地点遺跡（平26地点）出土遺物実測図	8
第10図 笹原遺跡（平26地点）	8
第11図 笹原遺跡（平26地点）トレンチ配置図、基本土層	9
第12図 笹原遺跡（平26地点）出土遺物実測図	10

写 真 図 版

咄戸沼遺跡(平26地点)

- 1-1 調査地全景
- 1-2 土木重機による掘削
- 1-3 1T (東から)
- 1-4 2T (東から)
- 1-5 2T (西から)
- 1-6 2T 2土坑 (西から)
- 2-1 1T断面 (北から)
- 2-2 2T断面 (北から)
- 2-3 2T断面② (北から)

北近藤第二地点遺跡(平26地点)

- 2-4 調査地全景
- 2-5 土木重機による掘削
- 3-1 1T (東から)
- 3-2 2T (東から)
- 3-3 3T (東から)
- 3-4 4T (南から)
- 3-5 2T内遺構 (南から)
- 3-6 3T~4T内1溝 (東から)
- 3-7 3T内2溝 (南から)
- 4-1 3T断面 (南から)
- 4-2 4T断面 (東から)
- 4-3 2T遺構内断面 (北から)

笹原遺跡(平26地点)

- 4-4 調査地全景
- 4-5 土木重機による掘削
- 5-1 1T (東から)
- 5-2 1T (西から)
- 5-3 2T (西から)
- 5-4 3T (西から)
- 5-5 4T (西から)
- 5-6 1T内1溝 (西から)
- 5-7 3T内井戸 (南から)
- 6-1 1T断面全体 (東から)
- 6-2 3T断面全体 (東から)
- 6-3 1T断面 (南から)
- 6-4 2T断面 (南から)
- 6-5 3T断面 (南から)
- 6-6 4T断面 (南から)

出土遺物写真

第1章 館林市の環境

1. 地理的環境



第1図 館林市の位置

この「低台地」は、「邑楽・館林台地」と呼ぶ洪積台地であり、太田市高林から本市中央部を東西に延び、隣接する板倉町まで続いている。また、大泉町古海から本市高根に至る台地の北側に沿って、日本最古の砂丘の一つである埋没河畔砂丘が走っており、本市最高標高点はこの上にある。

「低地帯」は、おもに利根川や渡良瀬川によって形成された冲積低地である。台地北側の低地帯には、旧河道、微高地や自然堤防が目立ち、一方、台地南側の低地帯では、茂林寺沼など大小の沼や湿地帯が形成されている。こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へ向かって緩く傾斜する傾向が見られ、台地面と低地面の比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。「邑楽・館林台地」と呼ぶ洪積台地は、沖積低地から延びる多くの谷地により樹枝状に開析されている。そのなかでも市内最大の谷は、本市中央部を東流する鶴生田川及び駒込川にかけての谷で、台地を南北に二分している。こうした洪積台地を開析する谷には、他にも茂林寺沼、蛇沼、近藤沼などの沼を伴うものが多く、本市景観の特徴の一つとなっている。

2. 歴史的環境

館林市内に所在する遺跡は、145ヶ所である。昭和63年刊行の『館林市の遺跡』(市内遺跡詳細分布調査報告書)には、そのうちの144ヶ所について詳細が報告されている。

分布調査による採集遺物から大別した、各時代の遺跡数は次のとおりである。

旧石器時代の遺跡3遺跡、縄文時代の遺跡13遺跡(縄文土器のみ採取できた遺跡)、弥生時代の遺跡は0(弥生時代の遺物を採取できた遺跡2遺跡)、古墳時代へ平安時代の遺跡(土器等の出土した遺跡)96遺跡(うち縄文時代の遺物も採取できる遺跡は23遺跡)、古墳は17遺跡(古墳総数25基)、中世生産址1遺跡、中世城館址12遺跡、近世城館址2遺跡である。(ただし、複合した時代の遺物散布地が見られるため、その中心になると考えられる時代でまとめたものである。)

これらの遺跡の分布は、地形的な特徴と大きく関わっていることが観察される。館林市内に所在する遺跡の時代的変遷と地形的な関わりを概略してみると、次のようになる。

《旧石器時代》

この時代の遺跡は、市内の標高の高い地域に集中する傾向を見せる。邑楽・館林台地の北西に沿って、鞍掛山脈と地元で呼ばれる内陸河畔砂丘(自然堤防)上に、その多くが確認されている。

《縄文時代》

この時代になると、遺跡数が増えるとともに洪積台地上に當まれるようになる。前期や中期の遺跡は、池沼や谷地を望む舌状台地上の平坦面に確認されることが多い。後期以降には遺跡数は減少し、その所在は、台地の斜面から微高地に移る傾向がある。後・晩期の包含層等は低地(洪積地)におよぶ。

《弥生時代》

弥生時代の遺跡として確認されたものはないが、微高地や台地の斜面等で、遺物などがわずかに確認されている。

《古墳時代》

前期の遺跡は少ない。遺跡は、洪積台地の斜面からテラス状の微高地に所在することが多く、この傾向は、弥生時代の遺物散布に似ている。中期には、遺跡の数が増えるとともに、その所在は、台地の斜面から台地上の平坦面へと移行する。後期には、遺跡数は増大し、台地上の平坦部に所在する場合が多い。墳墓としての古墳は、25基が残存している。古墳群が2ヶ所あり、一つは日向地区を中心とする邑楽・館林台地上、もう一つは高根地区を中心とする内陸河畔砂丘上にある。その他単独のものも多いが、そのいずれもが谷や谷地等をみおろす洪積台地上に所在している。

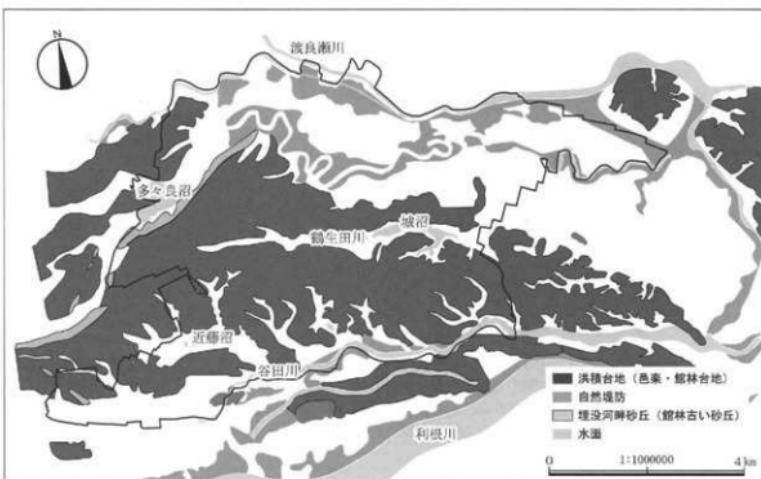
《奈良・平安時代》

この時代の遺跡は急増する。台地の内部や全面で遺物の採取ができるところから、この時代以降は台地上に普遍的

に集落等が営まれてきたことを示唆している。

《中世・近世》

この時代の候館址については、伝説的な要素が多く実体ははつきりしないが、中世末には館林城が築かれ、近世には館林城を中心として城下町が形成された。



第2図 館林市の地形概念図



第3図 平成26年度 調査遺跡の位置

第2章 確認調査の概要

1. 咲戸沼遺跡（平成 26 地点）



第4図 咲戸沼遺跡 (1:2500)

所 在 地 館林市堀工町字咲戸沼
723番2
調査原因 個人住宅
調査期間 平成 26年6月17日～
6月21日
調査面積 約24m²

(1) 遺跡と周辺の環境

咲戸沼遺跡は市街地の南方、東武伊勢崎線茂林寺前駅から東に約1kmの洪積台地上に位置する。邑楽・館林台地の南部にあたり、遺跡の西方には群馬県指定天然記念物「茂林寺沼及び氏地蘆原」が存在する。周辺は住宅用地と農地とが混在して利用されている。遺跡範囲北側では住宅用地、南側の低地では稻作を中心とする農地としての利用が主となる。

本遺跡ではこれまでに3回（平成14・17・19年度）の発掘調査が行われている。道路改良工事に伴って行われた平成17年度の調査では縄文時代中期の土器が大量に出土した。本遺跡全体の出土遺物も縄文時代の遺物が主となっている。本遺跡ではこれまでの調査成果から、範囲南部（平成14・19年度調査）で遺物確認量が少なく、範囲北部（同17年度調査）では遺物確認量が多くなる傾向が見られる。これは、北から南に向かって標高が下がる本遺跡の地形的な特徴によるものと考えられる。

(2) 調査の概要

咲戸沼遺跡（平26地点）の確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ東西に2本のトレーナーを設定した。土木重機により表土を排除し、その後、土層断面の観察を行ないつつ人力で関東ローム層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出を行なった。平26地点は遺跡範囲北西部の中央付近に位置する。

現地表面からローム層までの深度は約65cmであった。両トレーナーともに土中は強い搅乱を受けているが、南側の2トレーナーでは特に強い搅乱が見られる。現在の本地点は北から南方向へやや傾斜が見られる程度であるが、調査による土層観察の結果、南側2トレーナーからは埋土と見られる層が厚く見られ、傾斜解消のための盛土が行なわれたことがうかがえた。このことから、過去の本地点は現在より北から南への傾斜が大きかったことが推定される。

(3) 基本土層

本地点の基本土層は、第I層～第V層に分けられる。第I層は表土であり、砂利を多く含む。第II層の暗褐色土層は現代の擾乱が多く見られる。第III層は褐色ローム層である。しまり、粘性はともにややある。第IV層は水分を多く含み、粘性をもってロームブロックを少量含む。第V層はローム層である。

(4) 検出された遺構

本地点南側に設置した2トレーナー内、土坑3基を確認した。いずれも激しい搅乱を受けており、土坑内から検出した遺物はビニールや針金など現代のものがほとんどである。これは、本地点を平坦にする目的で行なわれた盛土・埋土の影響と思われる。なお、土坑内の埋土を排除してさらに削除を続けたところ、地表面から約150cmの位置で湧水が生じた。

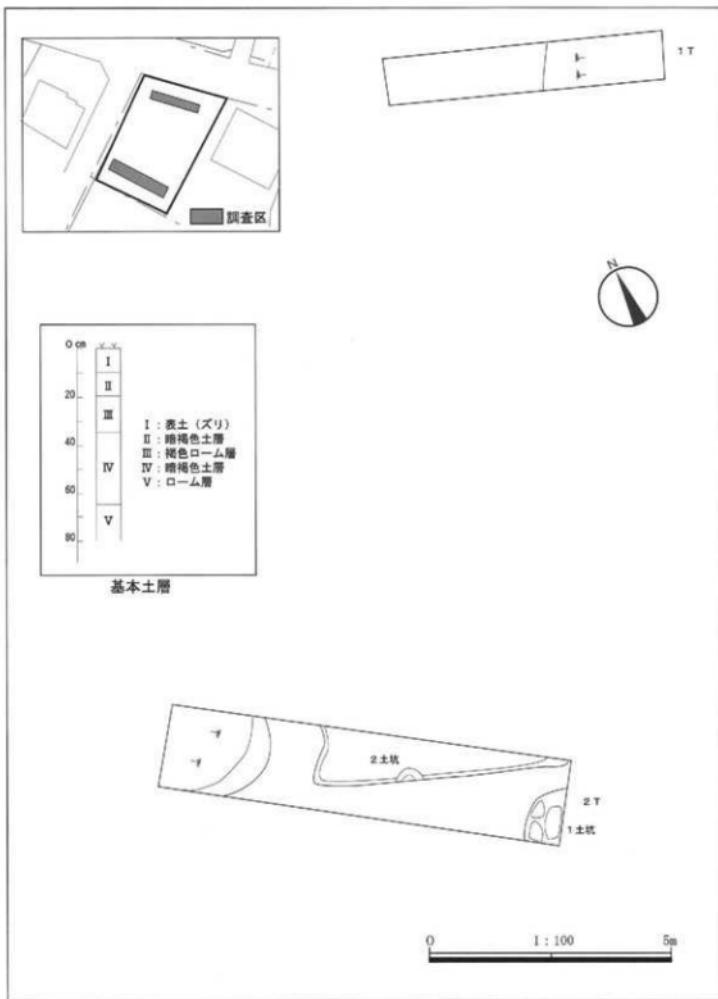
(5) 出土された遺物

本地点では縄文から近世まで、幅広い年代の遺物が確認された。本地点で確認した遺物はいずれも特定の層から見られたものではなく、表土排除中あるいは人力でトレーナーを掘り下げる過程で見られた。発見の経緯から、過去の盛土や擾乱の際に混入したものと思われる。小規模な破片が多く、接合できた個体は少ない。また、現代の搅乱に伴うビニール・針金などの遺物が見られた。

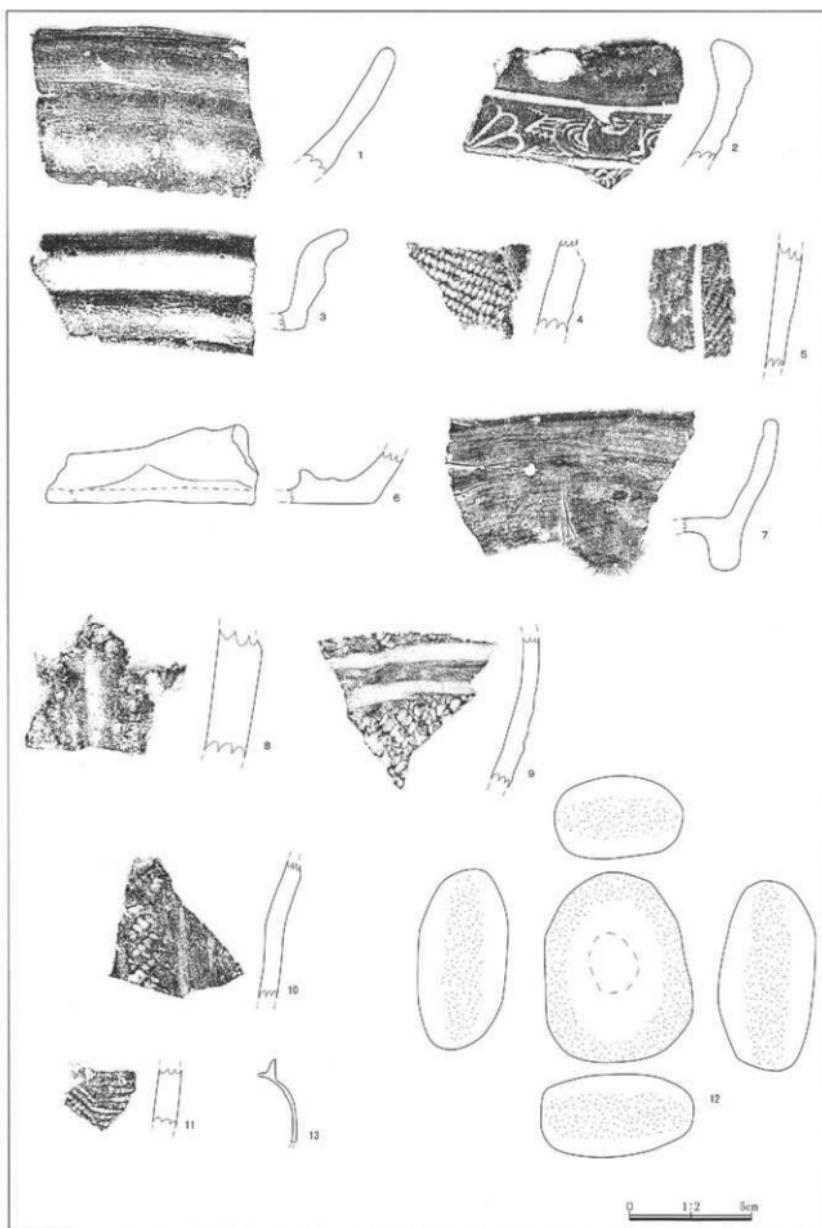
(6) まとめ

本地点は現在、平坦な地形となっているが、土中及び土層断面の観察から、以前は北から南へ傾斜していたこと、その傾斜を解消するために盛土や埋土が過去に行なわれたことが確認できた。盛土・埋土と思われる層からは現代の遺物（ビニールなど）が見られ、また、確認した遺構の中にも同様に現代の遺物が多く含まれていた。

これらの状況から、本地点においては近代以降に傾斜解消を目的とする整地が行われ、その際に掘削を行なったことで土坑が形成され、同時に本地点へ強い搅乱を与えたことが推定される。今回の調査では住居跡やそれに伴う遺構など、保存の対象となる遺構や遺物は確認できず、また、土中は既に人为的な強い搅乱を受けていることから、本地点における開発行為により埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第5図 噴戸沼遺跡トレンチ配置図(1:100)、基本土層(1:20)



第6図 咄戸沼遺跡 出土遺物実測図 (1:2)

2. 北近藤第二地点遺跡（平成 26 地点）



第 7 図 北近藤第二地点遺跡 (1:2500)

所 在 地 館林市苗木町字北近藤

2578 番 6, 2578 番 7,

2578 番 42

調査原因 その他建物

調査期間 平成 26 年 8 月 1 日～

8 月 26 日

調査面積 約 180 m²

(1) 遺跡と周辺の環境

北近藤第二地点遺跡は市街地の西方、東武伊勢崎線館林駅から西に約 3 km の市街地郊外に位置し、遺跡南側に北国道 354 号線が通る。遺跡範囲北側は工業地域及び住宅地、南側は耕作地としての利用が主となっている。本遺跡における発掘調査の実績はこれまでにないが、周辺の遺跡からは多くの遺構・遺物が検出されている。

特に、本遺跡東部に位置する北近藤第一地点遺跡や、本遺跡南側に位置する南近藤遺跡ではこれまでに複数回の調査が実施され、ともに古墳時代後期を主とする多数の住居跡が確認されている。発掘調査の成果から、距離的・時期的に近接するこれらの遺跡を含む大規模な集落がこの地域に存在していたことがわかつている。

今回調査が行われた北近藤第二地点遺跡（平成 26 地点）は南近藤遺跡の北約 100m の場所に位置していることから、周辺遺跡と近接する時代の遺構・遺物の検出が想定されて調査が行われた。

(2) 調査の概要

北近藤第二地点遺跡（平成 26 地点）の調査は、工事予定区域の地形に合わせて東西に 3 本、南北に 1 本のトレンチを設定した。土木機械により表土を排除し、その後、土層断面の観察を行いながら人力で閑東ローム層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出を行った。平成 26 地点は遺跡範囲南端にあたる。

本地点の現地表面は耕作土であった。地表面から 20cm ほど掘り下げるごとに、ローム層に到達した。本地点では東から西、北から南へ、ともにやや傾斜が見られる。

(3) 基本土層

本地点の基本土層は、第 I 層と第 II 層に分けられる。第 I 層は表土であり、耕作土である。厚さは約 20cm で、調査区全面に広がる。第 II 層はローム層である。明褐色を呈し、こちらも調査区全面に広がる。

第 II 層ローム層の土層断面を観察したところ、各トレンチとともに平坦になっている様子が見られた。第 I 層が耕作土であることから、從前の第 II 層ローム層上部及び過去にその上面に存在していた層は耕作やそれに伴う整地等による影響を受けて消失し、平坦な現在の層序を形成したものと考えられる。

(4) 検出した遺構

各トレンチ内を人力で精査した結果、溝 2 条、土坑 11 基、戸門 1 基を確認した。また、2 トレンチ内では正方形状に掘り込まれた、建物跡と推定される遺構が確認された。

土坑は調査地内各所で確認された。深さは表土より 60～80cm、形状は不整形、遺物を伴わないものが多い。耕作の痕跡、または植物の根の痕と考えられる。溝は 3 トレンチ及び 4 トレンチで検出し、深さは表土より約 130cm、遺物は伴わなかった。いずれも性格は不明である。戸門は 1 トレンチの東で検出した。1 トレンチ床面より掘削したところ、約 250cm の位置で湧水を確認した。

建物跡と見られる遺構は 2 トレンチ中央付近で検出した。4 層の堆積から成り、それらはレンズ状に堆積する。トレンチ床面から掘り下げ、70cm の位置でハーフドームに達した。遺構内からは近代以降と思われる磁器片が確認できた。遺構中央付近にはピットが集中して見られたが、柱穴とは判断できず、また、炉など生活に関する遺構も見られなかったため、その性格は不明である。

(5) 出土した遺物

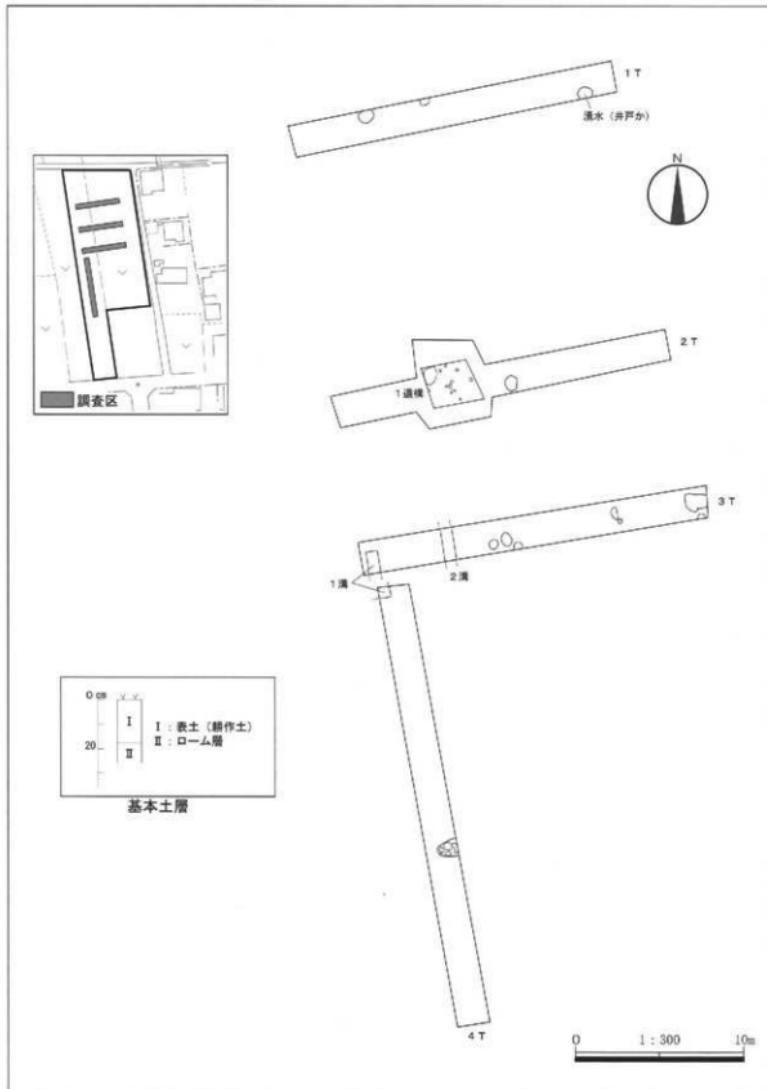
縄文土器片、磁器片が主に確認された。いずれも確認量は少量であり、元の器種や性格を明らかにするには至っていない。これらは耕作に伴う影響を受けていると思われ、特定の地点・層より遺物を確認することはできない。また、表土・覆土排除の際に見られたものが多い。

2 トレンチ内で確認された建物跡と思われる遺構内からは磁器片が見られた。これらは近代以降のものと思われる。元は同一個体と思われるが、いずれも細かく破片となっており、從前の形状を復元するには至らなかった。

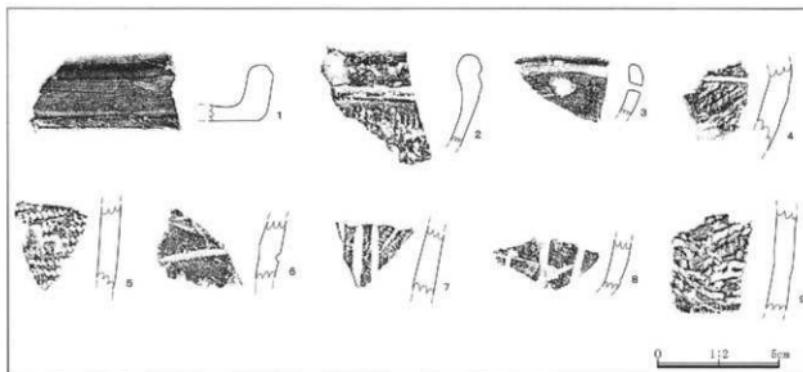
(6)まとめ

本地点では土坑や溝、井戸、建物跡と推定される遺構など、各種の遺構が確認された。耕作に伴うと考えられるものが多く、その性格を示す遺物もないため、性格が明らかでないものが多い。土層の堆積状況からは耕作やそれに伴う整地等によって本地点が大きな影響を受けたことが確認できた。遺構・遺物を包含していた層は耕作等により既に消失したと考えられる。

今回の調査では本地点では保存の対象となる遺構・遺物は確認できなかったことから、開発行為による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第8図 北近藤第二地点遺跡トレンチ配置図(1:300)、基本土層(1:20)



第9図 北近藤第二地点遺跡 出土遺物実測図 (1:2)

3. 笹原遺跡 (平成 26 地点)



第10図 笹原遺跡 (1:2500)

の調査では旧石器時代から縄文時代後期にかけての遺物が多く見られているが、それらに伴う住居跡等の遺構は確認されていない。

(2) 調査の概要

笹原遺跡 (平成 26 地点) の確認調査は、工事予定区域の地形に合わせて東西南北に 4 本のトレンチを設定した。土木重機により表土を排除し、その後、土層断面の観察を行ないつつ人力で関東ローム層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出を行なった。平26 地点は遺跡範囲南端にあたり、地点東側は茂林寺沼湿原に接する。

本地点は北から南へ小さく、西から東に大きく傾斜する。これは遺跡を含む周辺地域自体が茂林寺沼湿原に向かって標高が下がる状況と一致する。調査地点西側に設置した 1・2 トレンチの西側の一部ではローム層が確認できるものの、両トレンチともに中央付近で土層の大きな落ち込みが断面に見られ、これより東側ではローム層を確認できなかった。

(3) 基本土層

本地点の基本土層は、第Ⅰ層～第Ⅳ層に分けられる。第Ⅰ層は表土であり、耕作土である。本地点全面で見られ、厚みに大きな差は見られない。第Ⅱ層、第Ⅲ層は下部に至るほど黒色が強くなり、それに伴い含水量も増す傾向にある。第Ⅳ層はローム粒をやや含む。

第Ⅲ層以下は地表より厚みに差が見られる。特に調査地東側の 3・4 トレンチなど、調査区東側に至ると第Ⅲ層以下が厚くなる傾向にある。これらの層は湿原に由来する層と推定される。

所 在 地 館林市堀工町字法正谷

1857 番 1

調査原因 個人住宅

平成 27 年 1 月 9 日～

1 月 25 日

調査面積 約 98 m²

(1) 遺跡と周辺の環境

笹原遺跡は市街地南部、邑楽・館林台地の南辺にあり、県指定天然記念物「茂林寺沼及び低地湿原」(以下、茂林寺沼湿原)の北側に位置する。周辺の舌状台地の斜面にかけて広がり、周辺では近年、市街地化・宅地化が進んでいる。

同遺跡ではこれまでに複数回の発掘調査が実施されている。特に、道路改良工事に伴う平成 9 年度に行なわれた調査では縄文時代の遺物が大量に出土した。これまで

の調査ではこれまでも複数回の発掘調査が実施されている。特に、道路改良工事に伴う平成 9 年度に行なわれた調査では縄文時代の遺物が大量に出土した。これまで

(4) 検出した遺構

トレンチ内を人工で精査した結果、土坑7基、溝1条、井戸1基が確認した。遺構が確認された場所は本地点西側の1・2トレンチにやや偏る傾向にある。東側で遺構が確認できたのは4トレンチに土坑2基、3トレンチは井戸1基のみである。今回の調査では住居や、それに伴う遺構は確認できなかった。

確認した土坑の中には、埋土やビニール等の遺物が含まれ現代の擾乱と判断できるものや、根などの残存物やその形状から耕作の影響と思われるものが見られた。また、1・2トレンチの東側では遺物が比較的多く確認されたが、土中の水分が多く、水の流れの痕跡が見られた地点であることから、何らかの水の影響によって集まつた可能性が考えられる。

井戸は3トレンチ西端で確認された。確認面から掘り下げたところ、表土より約1mの位置で湧水を確認した。湧水を確認した層は泥炭となっており、湿原を構成する層であると思われる。

(5) 出土した遺物

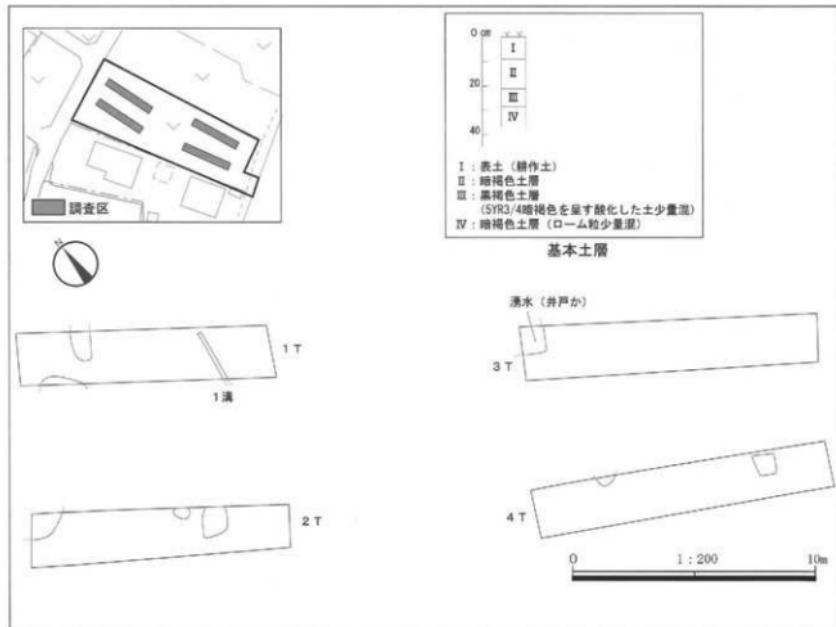
確認された遺物は縄文土器片を中心に、土器器片や磁器片が見られたが、その数は本地点の調査面積に比して少量といえる。特定の遺物集中箇所は見られていない。一部、勝板式と見られる縄文土器片が見られるほか、早期と思われる破片も見られた。それらの器種や詳細は明らかでない。

確認できた遺物はその出土状況から、本地点内及び周辺の水の流れによる影響を受けたものと思われる。

(6) まとめ

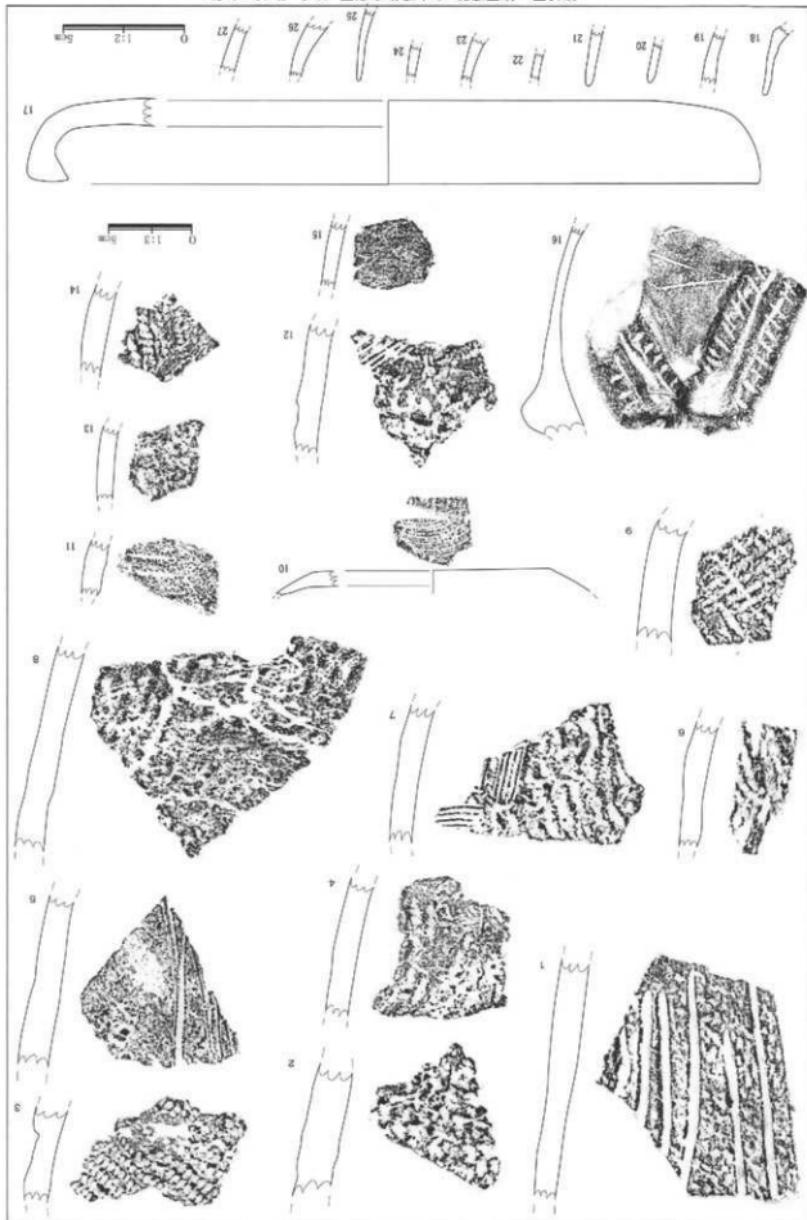
本地点での調査では、茂林寺沼湿原に向かって土地が傾斜している様子を明確に見ることが出来たが、住居やそれに隣接する遺構等の確認には至らなかった。茂林寺沼湿原の範囲が過去においては現在より広範であったことは都市計画図等の資料からも確認することができるが、今回設置したトレンチ内の様子やその断面からは、本地点が過去は湿原とその周縁部であったことがうかがえた。縄文時代の前期や中期と思われる土器片が見られたが、いずれも小型の破片が主である。耕作や、水の流れの影響によって運び出したものである可能性が考えられる。

土中の観察から、本地点の大部分は人が生活を営むには不都合な環境であったと思われ、今回の調査でも保存の対象とする遺構・遺物を確認するには至らなかった。そのため、本地点における開発行為について埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第11図 笠原遺跡トレンチ配置図(1:200)、基本土層(1:20)

圖124 簡易鐵器出土遺物實測圖 (1:3, No.16~12)



写 真 図 版

咄戸沼遺跡（平26地点）

(写真図版1)



1-1 調査地全景



1-2 土木重機による掘削



1-3 1T (東から)



1-4 2T (東から)



1-5 2T (西から)



1-6 2T 2土坑 (西から)



2-1 1 T 断面（北から）



2-2 2 T 断面（北から）



2-3 2 T 断面②（北から）

北近藤第二地点遺跡（平26地点）



2-4 調査地全景



2-5 土木重機による掘削



3-1 1 T (東から)



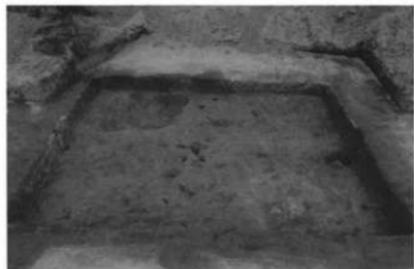
3-2 2 T (東から)



3-3 3 T (東から)



3-4 4 T (南から)



3-5 2 T 内遺構 (南から)



3-6 3 T～4 T 内 1 溝 (東から)



3-7 3 T 内 2 溝 (南から)



4-1 3 T断面（南から）



4-2 4 T断面（東から）



4-3 2 T遺構内断面（北から）

笛原遺跡（平26地点）



4-4 調査地全景



4-5 土木重機による掘削



5-1 1 T (東から)



5-2 1 T (西から)



5-3 2 T (西から)



5-4 3 T (西から)



5-5 4 T (西から)



5-6 1 T 内 1 溝 (北から)



5-7 3 T 内 井戸 (南から)



6-1 1 T断面全体（東から）



6-2 3 T断面全体（東から）



6-3 1 T断面（南から）



6-4 2 T断面（南から）



6-5 3 T断面（南から）

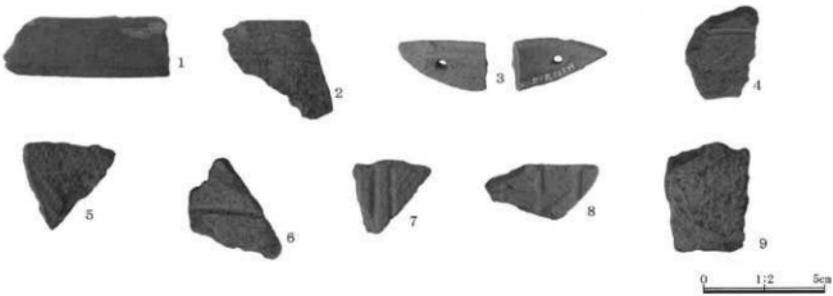


6-6 4 T断面（南から）

咄戸沼遺跡

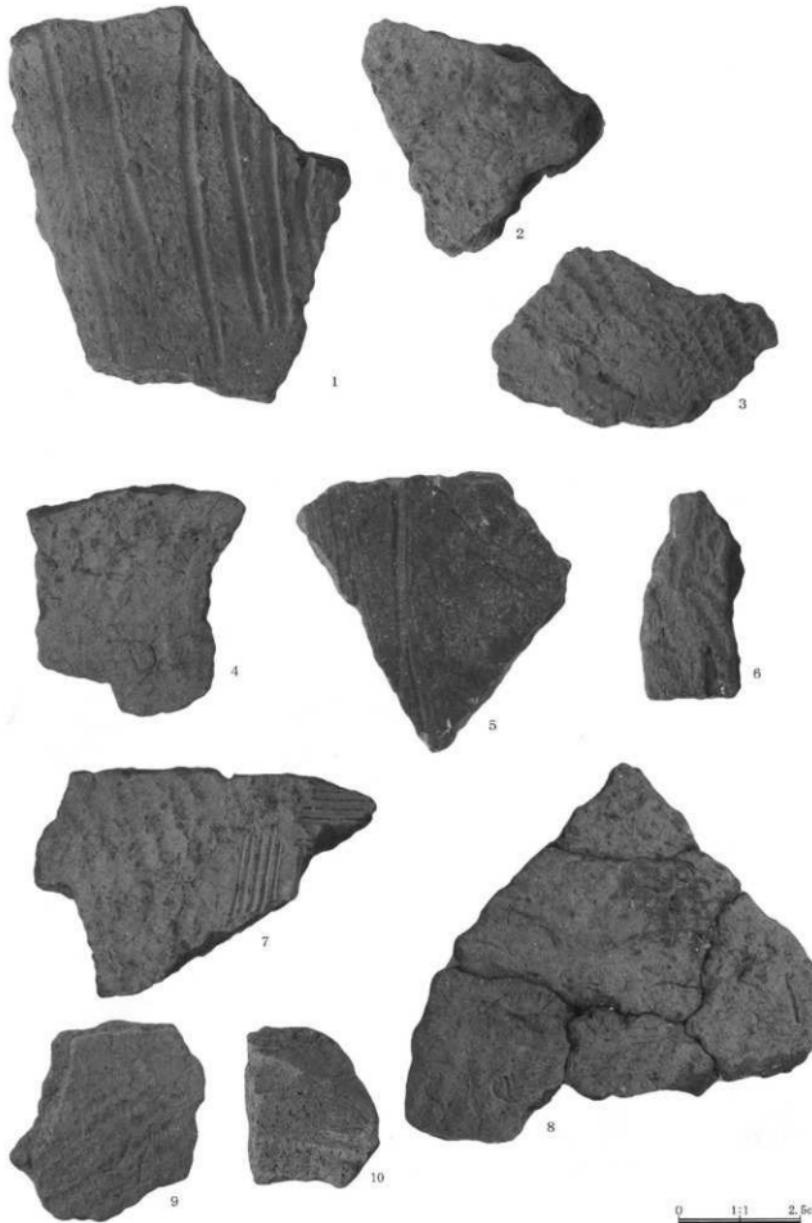


北近藤第二地点遺跡

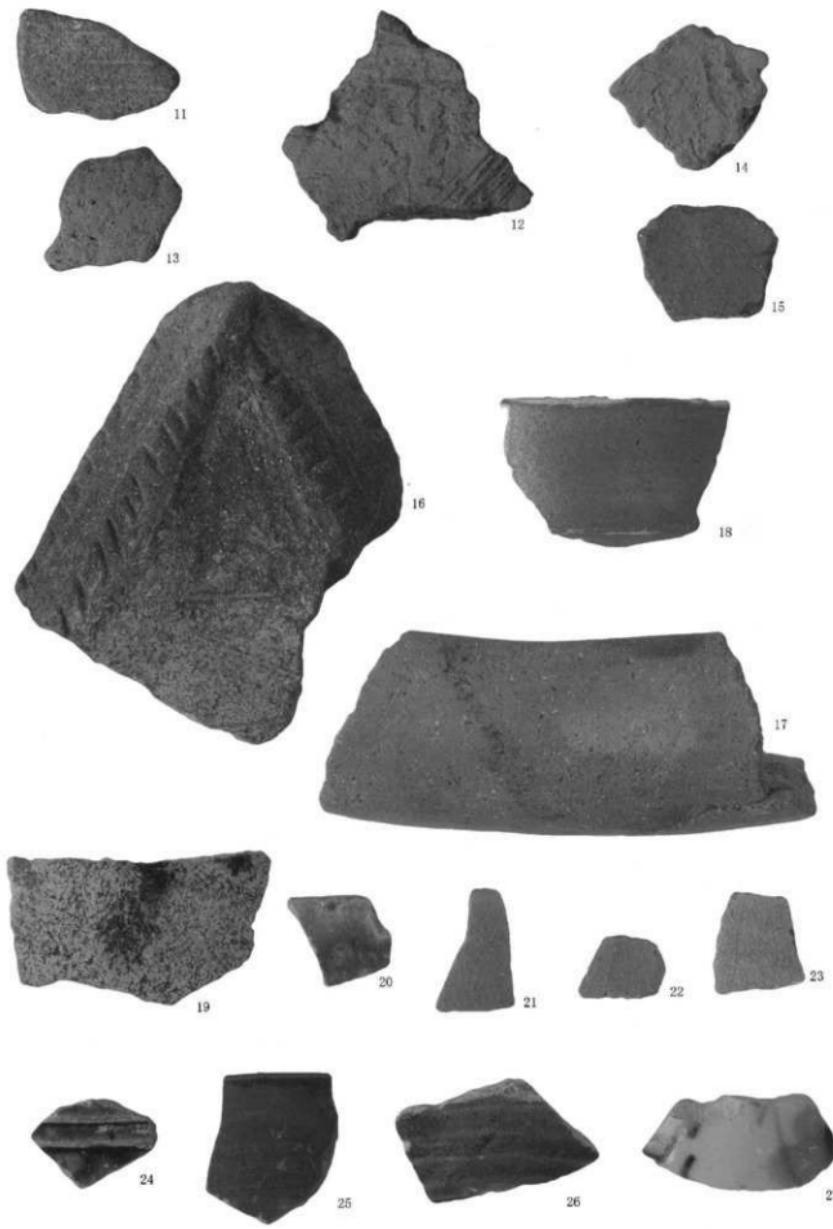


笹原遺跡

(写真図版 8)



0 1 2.5cm



ふりがな	たてばやししないいせきはつくつちようさほうこくしょ						
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書						
副書名	平成26年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査				卷次	_____	
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書				シリーズ番号	第52集	
編集者名	奈良 純一 金子 陽佑				編機	集閲	館林市教育委員会
編集機関所在地	〒374-8501 群馬県館林市城町1番1号						
発行年月日	2015(平成27)年3月31日						
市町村コード	102075						
所収遺跡	所在地	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
竪戸沼遺跡	堀工町	109	361333	1393216	20140617～20140621	約24m ²	個人住宅
北近藤第二地点遺跡	苗木町	92	361351	1392951	20140801～20140826	約180m ²	その他建物
笛原遺跡	堀工町	101	361345	1393147	20150109～20150125	約98m ²	個人住宅
遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
竪戸沼遺跡	散布地	縄文	土坑3基		縄文土器片、磁器片	慎重工事	
北近藤第二地点遺跡	散布地	時代不明	土坑11基・溝2条・遺物跡遺構1ヶ所・井戸1基		縄文土器片、磁器片	慎重工事	
笛原遺跡	散布地	縄文・平安	土坑7基・溝1条・井戸1基		縄文土器片、土師器片、磁器片	慎重工事	

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第52集

館林市内遺跡発掘調査報告書

—平成26年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査—

編集・発行 館林市教育委員会 文化振興課 文化財係（館林市文化会館内）
〒374-0018 群馬県館林市城町3番1号 電話 0276-74-4111
印 刷 上海印刷工業株式会社
発行年月日 平成27年3月31日



文化財愛護シンボルマーク

<http://www.city.tatebayashi.gunma.jp/bunka/>